

令和7年度

地域のモデルとなる事業所における好事例集



ふくい介護テクノロジー・業務改善支援センター

(運営:公益財団法人介護労働安定センター福井支部)

# 目次

P1・・・【事例①】

見守り支援機器(センサ・カメラ)導入による科学的介護の実践  
医療法人王山 介護老人保健施設 リハビリセンター王山

P3・・・【事例②】

ICT化推進による大幅な業務負担軽減の事例  
社会福祉法人おおた福社会  
介護老人福祉施設 HOMETOWNコスモス

P5・・・【事例③】

ICT活用により転記の繰り返しを迎えた転機  
社会福祉法人坂井来春会  
認知症対応型共同生活介護 グループホームさかい

P7・・・【事例④】

外国人職員がいる施設の生産性向上の事例!  
株式会社アプト 通所介護 デイサービス アプト

P8・・・【事例⑤】

「あさくらモデル」による生産性向上の事例!  
社会福祉法人 一乗谷友愛会  
介護老人福祉施設 特別養護老人ホームあさくら苑

P9・・・【事例⑥】

ICT利活用により未来のスタッフに選ばれる取り組み!  
社会福祉法人敬仁会  
介護老人福祉施設 特別養護老人ホーム溪山荘

P10・・・【事例⑦】

機器導入で変化する期待、未来、新時代!  
社会福祉法人坂井来春会  
介護老人保健施設 坂井ケアセンター

P11・・・【事例⑧】

出来るところから始める無理のない改善の事例!  
社会福祉法人新清会  
介護老人福祉施設 特別養護老人ホームあさむつ苑

P12・・・【事例⑨】

データ活用によるLIFE取組を視野に入れたICT整備!  
社会福祉法人藤島会  
介護老人福祉施設 特別養護老人ホーム藤島園

## 事例①～見守り支援機器（センサ・カメラ）導入による科学的介護の実践



【リハビリセンター王山 事業所外観】

### リハビリセンター王山

【法人名】 医療法人 王山（オウザン）

【事業所名】 リハビリセンター王山

【所在地】 福井県鯖江市旭町1-3-22

【サービス種別】 介護老人保健施設

【定員数】 62名



【見守り支援機器導入前ミーティング】

鯖江市中心部にある介護老人保健施設。協力医療機関の広瀬病院と連携し、医療・介護の中核を担う事業所として運営しています。施設理念である「目配り・気配り・思いやり」のこもった介護を実践しています。職員間でも「お互い様の精神」を大切に働きやすい職場を目指しています。5年先・10年後も持続可能な医療介護体制の実現のために新しい技術や価値観を吸収しながら日々頑張っています。

## 事業所における課題

従来から介護現場における生産性向上についての取り組みは進めていましたが、今回の生産性向上等に関する伴走支援では、主に3つの構造的な課題に着目しました。まず、介護職員等の慢性的不足や職員の高齢化に加え、将来的な夜勤職員の確保が困難になりつつある点が挙げられました。特に夜勤業務においては、入所利用者約30名に対し夜勤職員1名体制で稼働しており、少人数体制への心理的・身体的負担や、事故発生時の見逃し不安といった現場の声が強くなっていました。これらの職場環境の改善と、限られた人数でも安全にケアを継続できる体制の構築が最優先の課題となっていました。

次に、職員の身体的負担の軽減も大きな課題でした。特に中重度介護者の移乗・移動介助は、肩・腰・膝への負荷が大きく、離職リスクや労働災害にもつながる可能性がありました。現場の負担を直接的に軽減するため、介助技術の向上だけでなく、補助用具の導入による物理的な負荷軽減が求められていました。

さらに、適正な労務管理を継続していくための基盤づくりも急務となっていました。令和8年春頃までに人事労務・勤怠管理システムを法人内で内製化する方針が示されましたが、実務を担う事務員には労務経験が少なく、専門知識やシステム運用のノウハウが不足している中で、約80名分の複雑な管理を正確に行う必要がありました。そのため、未経験者でも直感的に操作でき、業務の自動化を促進できる「使い勝手の良さ」を重視したソフト選定が不可欠でした。これら「夜勤の安全確保と人員不足への対応」「身体的負担の軽減」「事務管理のシステム化」という、相互に関連する課題を解決するため、見守り機器や勤怠管理・人事労務ソフト等のICT活用、および福祉用具の導入を決定しました。



## 業務改善の取り組みについて

3つの構造的な課題に対し、当該事業所では解決に向け、改善に取り組みました。

まず、将来的な夜勤職員の確保と安全なケア体制の構築を目的として、見守り支援機器（センサ・カメラ）の導入を進めました。選定にあたっては、現行の介護記録ソフトと連携し、情報を自動転記できるシステムを重視。これにより、見守り業務の質向上と記録業務の省力化を同時に目指す計画としました。コスト面を考慮し、カメラは全床導入ではなく26床への重点配置とするなど、現場の負担軽減と投資対効果のバランスを最適化させる導入内容としました。

それから、直接介助における身体的負担を物理的に軽減するため、中重度介護者の移乗・移動介助においてスライディングシートを導入しました。職員の腰痛リスク低減のみならず、利用者にとっても圧迫感の少ない、安全で安楽な移乗介助の手順を現場に浸透させることを主眼に置きました。

最後に、適正な労務管理を継続していくための基盤づくりとして、経験の浅い職員でも正確な運用が可能な「勤怠管理・人事労務一体化ソフト」を導入しました。専門知識を補うためのサポート体制や、複雑な管理を自動化できる操作性を備えたソフトを厳選しました。事務負担の急激な増加を避ける段階的な移行スケジュールを組みました。今回のプロジェクトでは、施設長を責任者とし、各フロアのリーダーをスペシャリストとして養成し、業務支援アドバイザーの助言を受け、職員間で主体的に教え合う現場主義体制を構築しました。

## 事業所における改善効果について

見守り支援機器（全62床、カメラ26台）の導入・運用では、特に夜勤業務において、従来の介護職員等の勤や経験だけに頼らず、見守り支援機器から得られる入所者のリアルタイムデータを情報収集に活用できるようになりました。これにより、不要な巡回が減り、本当に必要なケアにあてる時間を確保できています。

また、事故予防や緊急時の迅速な対応、再発防止策の立案にデータを役立てることで、結果的に夜勤業務での心理的・身体的負担の軽減に繋がっています。入所者にとってもライフリズム（睡眠リズム）の改善に寄与すると考えています。

見守り支援機器導入をきっかけに業務の見直しも行いました。リハビリ職員は入所者の睡眠ログ（履歴）を把握して一番体調が良い時間帯にリハビリを行うことで、効果を最大限しています。医師はデータを基に適切な投薬調整を行うなど、ケア手法を変化させています。

さらに、得られた客観的な活動データを「ご家族への状態説明」に活用することで、より安心して在宅復帰を検討いただける環境を整えています。今後は施設独自の業務マニュアルを策定し、新人教育の面でも役立てていく方針です。

中重度介護者の移乗・移動介助の際、スライディングシートの使用法を業者等と確認して導入しました。これにより介護職員の身体的負担（腰痛リスク等）が一定程度改善されました。安全性や利用者への影響についても引き続きモニタリングを進めます。

人事労務・勤怠管理業務の完全内製化で、経験が少ない事務職員でも迷わず操作できる体制が整いました。新規職員の入職手続きから給与計算、年末調整までの一連の労務業務において、データ連携により転記ミスが減り、ペーパーレス化が進むことで業務効率が上がっています。約80名分の複雑な管理を正確に行える基盤が構築されました。



【大型モニタを用いた見守り支援機器の活用】

今回導入した【見守りカメラ・AIスリープセンサ】

## 取り組み後の感想と改善活動を振り返り

### ■取り組み後の感想～管理者様より～

このプロジェクトを通じて、生産性向上委員会での意見交換が活発になり、職員の改善活動への意欲が徐々に高まるのを感じました。また、KPI設定の考え方を活用することで改善活動が数字として表れ、取り組みへのモチベーションアップに繋がりました。当施設は、介護老人保健施設であり、在宅復帰・在宅生活支援施設としての機能強化が求められています。今回の伴走支援プロジェクトを活用させて頂き、入所者の望む暮らしの実現のために、科学的介護の見地からもヒントを頂きました。

### ■取り組み後の感想～プロジェクトメンバーより～

生産性向上委員会では何をやるのか良く分からない状態からスタートしましたが、具体的にプロジェクトが進む中で、自身の直接介護業務との関連性を深く意識するようになり、取り組むべき方向性が見えてきたと感じています。生産性が向上することによって、介護現場における科学的介護の可能性が見えるようになり、職員達は心の余裕が出てきているのがわかりました。また、見守り支援機器の導入で入所者のライフリズム（睡眠リズム）が具体的にわかるようになり、今後ケアの質がさらに向上していくと感じています。空き時間でイベント等の楽しみ活動を色々計画していければと考えています。

### ■業務支援アドバイザーのワンポイントアドバイス

本プロジェクトの成功は、機器導入を目的とせず、課題解決の「手段」として運用体制を構築した点にあります。

①自組織での活用推進：委員会主導の勉強会で、活用法を自ら定着

②現場の不安解消と自分事に：夜勤等の切実な課題解決を掲げ、意識を統一

③科学的介護の実践：ライフリズムを事故予防に活かす、老健の機能強化に向けた大きな一歩

ICT化で生まれた「心の余裕」が、理想のケアと魅力ある職場作りの原動力となることを期待します。

## 事例②～ICT化推進による大幅な業務負担軽減の事例



【HOMETOWN コスモス 事業所外観】

当施設は自然に囲まれた全室個室のユニットであり、一人ひとりがゆったりとくつろげ、住み慣れた家のように生活スタイルやリズムを継続し自分らしい毎日を安心して送ることができるようサポートしています。職員は、相手の気持ちを快く受容できる「心」を持ちつつ、大変な仕事の中でも笑顔を忘れない「心意気」を持って、日頃の生活支援に従事しています。

### HOMETOWNコスモス

- 【法人名】 社会福祉法人 おおた福祉会
- 【事業所名】 介護老人福祉施設 HOMETOWNコスモス
- 【所在地】 福井県福井市帆谷町1字外山33
- 【サービス種別】 介護老人福祉施設
- 【定員数】 80名



【施設内イベントの様子】

## 事業所における課題

当該事業所において、以前より見守りセンサー機器等を導入していましたが、機能を十分に活用できていない状況でした。機器を導入する際に「何のために導入するのか」「どのような業務をどう変えたいのか」「どうありたいのか」といった目的や目指す姿を十分に検討する機会がなく、一部の職員しか機能を理解していない、または使われなまま保管されている機器もあり、十分な運用につながっていませんでした。

また、紙の記録とデジタル記録が併存しており、記録業務が二重化していたことも大きな課題でした。紙記録の廃止に対しては、これまでのやり方に慣れた職員から戸惑いや不安の声があり、新しい方法への移行がスムーズに進まない場面も見られました。

介護ソフトも導入していますが、こちらも機能を十分に活用できておらず、業務効率化にはつながっていない状況でした。PC操作に苦手意識を持つ職員が多く、数台のタブレットで記録業務を行っており、記録待ちの発生や利用者支援対応の優先による記録業務の後回しなどで、定時に退勤できない職員も多かったです。

また、慢性的な人手不足の中で、特に夜勤時間の休憩回しは職員にとって大きな負担となっていました。巡視や体位交換、入居者対応に追われ、座って休む時間も十分に確保できず、夜勤業務全体の負担が大きくなっていました。

生活支援業務に追われることで、入居者とゆっくり関わる時間が十分に確保できていない点も課題であり、またデジタル機器や新しい取り組みに苦手意識を持つ職員に対し、どのように関わり、進めていくかについても悩みがありました。



## 業務改善の取り組みについて



これらの課題を踏まえ、業務支援アドバイザーの助言のもと、「機器導入前にアナログの運用をしっかり改善する」ことを基本に、まず、体重などの記録用紙（紙媒体）を廃止し、デジタル記録に一本化しました。スマートフォンの台数を増やし、スマートフォンからの入力、インカムを使った音声記録ができるよう取り組むとともに、記録方法のルールを統一するなど業務の標準化も進めました。

これまで使用していた申し送りノートも廃止し、介護ソフト（ほのぼの）の申し送り機能を活用することで、情報共有の一本化を進めました。連絡手段については、LINE WORKSと介護ソフト（ほのぼの）のそれぞれの役割を整理し、使い分けのルールを明確にしました。

また、伴走支援のもと職員同士で話し合いを重ね、現状や課題を整理・可視化しました。介護ロボット等の施設内ミニ展示会開催や他施設見学等を通じて、職員が実際に「見て・触れて・イメージできる」機会を設け、導入後の業務を具体的に想像できるようにしました。

さらに、業務のタイムスタディ調査を実施し、業務の流れや負担の偏りを把握するとともに、業務の可視化や個別ケアに要する時間などを把握することができました。

マニュアル作成を支援するソフトも導入し、これまで時間がかかっていたマニュアル作成を一部自動化し、誰が見ても分かりやすいマニュアル作成に取り組んでいきます。

# 事業所における改善効果について

## ■持続可能な体制構築

伴走支援が始まる前までは、生産性向上委員会を行っても次につながるものがあまりなく、積極的な姿勢がありませんでした。今回伴走支援を行い、生産性向上委員会のメンバーの意識が変わり、積極的な研修参加、研修に参加した職員からの積極的な情報収集などの活動が見られました。

また、トップの意見ではなく、現場からの意見を大切にして取り組んできたことで、現場が主体となって取り組むことができてきました。

## ■現場オペレーションの変化による業務改善効果の実感

記録用紙やノートの削減が進み、A3用紙は月15枚×8ユニット、ノートは年間2冊×8ユニットの削減につながりました。印刷機が事務所に1台しかない中で、事務所から遠いユニットの職員が印刷のために事務所まで移動していた時間も、1回あたり約10分短縮されました。

二重記録が解消されたことで記録業務にかかる時間が短くなり、記録や申し送りがデジタル化されたことで、職員全体への情報共有がスムーズになりました。

さらに、スマートフォンが増えたことで、一人の職員にかかる負担（内線電話・ナースコール対応）が減るとともに、スマートフォンによる利用者居室での記録作成、リアルタイムの利用者記録の確認ができるようになりました。

現在、見守りセンサ機器は一部の入居者のみの使用となっておりますが、カメラ機能を活用した夜間巡視の訪室優先順位の決定や訪室要否の判断をすることで、不必要な訪室を減らしています。

## ■現場職員の業務負担軽減が、ケアの質の向上に繋がっていると実感

業務全体を見直した結果、短時間ではありますが、入居者と関わる余裕が生まれるようになりました。入居者一人ひとりと向き合い関わるができる仕事だからこそ、関わりを生み出せるよに介護テクノロジーを活用し、生まれた時間を入居者との関わりに充てていくことを目標に意識して取り組んでいます。

職員の負担軽減だけでなく、入居者一人ひとりに向き合う時間を生み出す第一歩となっております。



【見守りセンサー勉強会の様子】



【生産性向上委員会の様子】



【法人内ミニ展示会の様子】

## 取り組み後の感想と改善活動を振り返り

### ■取り組み後の感想～管理者様より～

当施設では、生産性向上委員会を中心に研修への参加などを通じて学びを重ねてきましたが、思うように取り組みを前に進めることができず、職員は日々さまざまな課題を抱えながらも、入居者の生活を支えるため懸命に業務にあたってきました。

各自が役割を意識しながら前向きに話し合いを重ねる過程を通じて、生産性向上に向けた意識と目標を、委員会全体で高く持てるようになったと感じています。

現在、ICT機器等が導入され、これからが新たな挑戦の始まりです。導入すること自体を目的とするのではなく、職員の業務負担を軽減し、その結果として生まれた時間を、入居者様一人ひとりに寄り添うケアへとつなげていくことが重要であると考えています。

### ■取り組み後の感想～プロジェクトメンバーより～

今回の取り組みは、介護機器を導入すること自体を目的とするのではなく、職員の業務負担を軽減することで生まれた時間を、入居者一人ひとりと向き合うケアにあてることを目指して進めてきました。伴走支援を受けながら現場の声を聞き、業務の可視化や標準化を進めたことで、これまで見えにくかった課題を明確にすることができました。

「導入して終わり」にせず、職員が安心して使い続けられる環境を整えながら、継続的な見直しと改善を重ね、ユニットケアの質の向上につなげていきたいと思えます。

### ■業務支援アドバイザーのワンポイントアドバイス

機器導入前に「アナログの運用」をしっかり改善できた自信が導入プロジェクトが円滑に進んだ秘訣と言えそうです。生産性向上推進体制加算I取得を視野に入れた事例として大いに参考になるものと感じています。

## 事例③～ICT活用により転記の繰り返しを迎えた転機



【グループホームさかい 事業所外観】

坂井市坂井町・春江町の各拠点で、施設サービスや在宅サービスなどを広く提供する法人です。グループホームさかいでは、2ユニット各9名の構成で、中等度の認知症の方に家庭的な環境の下で日常生活上の介護ケアを提供しています。利用者様の身体状態に合わせ、併設施設と共同してケアを行っています。また、地域密着型の施設として、地域に愛される施設を目指して行事や活動を推進しています。

### 認知症対応型共同生活介護 グループホームさかい

【法人名】 社会福祉法人 坂井来春会

【事業所名】 認知症対応型共同生活介護  
グループホームさかい

【所在地】 福井県坂井市坂井町折戸1-58

【サービス種別】 認知症対応型共同生活介護

【定員数】 18名



【グループホームさかい 事業所内観】

## 事業所における課題

今回の生産性向上等に関する伴走支援にあたり、現場の状況を改めて整理したところ、大きく3つの課題が浮き彫りになりました。

1つめは、記録業務の過重負担（多重転記）という実態がありました。メモから紙カルテ、さらには事務所の日誌へと続く「3重転記」が発生しており、同じ内容を何度も書き写す業務が現場を大きく圧迫していました。

2つめは、見守り体制の死角と安全確保への不安がありました。フロア内に死角が多く、職員が手薄な時間帯の転倒事故や、人員不足により利用者の状態を十分に把握しきれない場面が多くありました。

3つめは、リアルタイムな連携・通信手段の欠如という課題がありました。入浴介助中の異変時に大声で仲間を呼ぶしかない状況や、報告のために事務所までわざわざ足を運ぶ必要があるなど、非効率な通信環境が課題となっていました。

これらの課題を解決し、限られた人数でも安全で質の高いケアを継続できる体制を構築するため、今回のICT活用による業務改善に着手しました。



## 業務改善の取り組みについて

上記の課題に対し、以下の3つの改善に取り組みました。

1つめは、多重転記の完全撤廃と入力業務の効率化に取り組みました。「3重転記」を解消するため、タブレット端末による記録システムを導入し、ケアの現場での直接入力とデータの自動連動を徹底しました。これにより、事務所での転記作業や帳票整理の時間を大幅に短縮し、直接介助に集中できる環境を整えました。

2つめは、インフラ整備と現場視点での機器選定に取り組みました。先行施設の見学や、介護業界日本最大級の商談型展示会である「CareTEX(ケアテックス)」への参加を通じて、最新の機器情報を収集しました。全館Wi-Fi環境の整備を最優先で実施し、死角を補いつつコストを抑えられる「センサー・カメラ連動型」の機器を選定しました。高齢職員でも直感的に馴染める操作性も重視し、安全確認の精度を飛躍的に高めました。

3つめは、即時連携を可能にする通信体制の構築に取り組みました。インカムを全職員が装着することで、離れた場所にもリアルタイムで確実な情報共有ができる環境を構築しました。緊急時の「大声」や「移動」によるロスを解消し、心理的な安心感とともにチームケアの質を向上させました。

同時に、生産性向上委員会による丁寧な納得感づくりを行いました。「気づきシート」を用いて現場の困りごとを丁寧に吸い上げ、ICTでどう解決するかを具体的にシミュレーションしました。活用イメージを繰り返し共有することで、組織全体で改善に取り組む意欲を醸成していきました。

## 事業所における改善効果について

介護記録ソフトの導入について、現在、長年親しんだ紙運用からの移行期であり、デジタル入力にはまだ不慣れな部分もありますが、まずは日々の簡単な入力から段階的に進めています。これまでメモから紙カルテ、さらには事務所へ持参する日誌へと続いていた「3重転記」の負担が解消され、わざわざ離れた場所へ足を運んで報告する手間もなくなりました。

事務作業が劇的に効率化されたことで、利用者様一人ひとりと向き合う、ゆとりある見守りの時間の創出に繋がっています。

インカムとスマートフォンの連携により、入浴介助時などに発生していた「大声で他の職員や看護師を呼ぶ」という非効率な状況が解消されました。音声入力を活用することで、ケアの手を止めずにその場ですぐに報告や記録ができるようになり、リアルタイムで確実な情報共有が可能になったほか、蓄積された数値に基づく振り返りができるようになり、職員のモチベーション向上にも寄与しています。

見守りセンサー機器の導入により、居室内での就寝状態や行動が可視化されたことで、不要な訪室が減り、利用者様の安眠を妨げない質の高いケアが実現しました。また、申し送り時やユニット間での応援時など、かつて「死角」となっていた時間や場所の安全が手元の端末で常に確認できるようになったことで、事故に対する不安が大幅に軽減され、職員が心にゆとりを持って業務に当たれる安心感を生んでいます。

また、スタッフルームに設置した大型モニターで、各居室の状況やバイタル情報を全員が一目で把握できる環境が整いました。各自のメモに頼っていた情報共有から「全員で同じ画面を見て確認する」へと進化したことで、効率的かつ漏れのない見守りが可能になりました。この実感が、導入当初の「操作への不安」を「ICT活用への期待」へと変え、自律的に業務を改善していこうとする組織文化の醸成を後押ししています。



【端末での記録活用の様子】



【音声入力活用の様子】



【大型モニター活用の様子】

## 取り組み後の感想と改善活動を振り返り

### ■取り組み後の感想～導入担当者より～

現場職員から「気づきシート」などで困りごとを聞き取り、今の業務がICTでどのように置き換わるかを委員会で共有することで、改善のイメージを膨らませることができました。当初は委員以外の職員への周知がスムーズに進むか不安もありましたが、導入が始まると職員の認識も大きく変わり、活動への意欲が徐々に高まっていくのを感じました。今後はこの体制整備を法人内の他事業所へ横展開していくとともに、地域のモデル事例として積極的に情報発信を行っていきたいと考えています。

### ■取り組み後の感想～プロジェクトメンバーより～

最初は何から手をつければよいのか分からない状態でしたが、事業所が抱える問題や課題を一つひとつ挙げていくことで、ICT機器によってどのような改善ができるのかが明確になり、次第に楽しみになっていきました。実際に「3重転記」の負担や、大声で他職員を呼ぶといった非効率な状況が解消されたことで、現場の空気も明るくなったと感じています。自分たちの手で職場を変えていける実感が、今の大きなやりがいに繋がっています。

### ■業務支援アドバイザーのワンポイントアドバイス

現場の「負」を起点にしたボトムアップ：3重転記や連絡の不便さといった、現場が日々感じていた具体的な「痛み」を解決のターゲットにしたことで、職員の主体的な改善意欲を引き出せました。

不安を「期待」に変える納得感づくり：導入前に「何がどう楽になるか」を具体的にシミュレーションしたプロセスは、高齢職員も多い現場でICTへの心理的ハードルを下げる鍵となります。

「転記」から「転機」への組織変革：単なる効率化に留まらず、物理的な制約から解放されたことで、職員自らがケアや職場の未来をポジティブに考え直す、「転機（ターニングポイント）」となっていきます。

## 事例④～外国人職員がいる施設の生産性向上の事例！



【アプトケア・三国 事業所外観】

### デイサービス アプト

【法人名】 株式会社 アプト

【事業所名】 アプトケア・三国

【所在地】 福井県坂井市三国町東三国2丁目9-23

【サービス種別】 通所介護

【定員数】 30名



【普段の過ごし方の様子】

当施設は、利用者の意思と自己決定を最大限に尊重した支援を行っています。高齢者住居法および介護保険法の指定基準に沿いながら、居宅において自立した日常生活を継続できるよう、尊厳の確立と生活の継続性を大切に支援しています。

### 事業所における課題

- 外国人職員が多いため日本語が伝わらず、情報共有がうまくいかないことがありました。
- 職員が手薄な時間帯での見守りが利用者の安全確保に支障が出ていました。
- 利用者とはじっくり向き合えないほど多忙で作業をしながらのコミュニケーションとなっていました。
- 介護記録ソフトが職員に浸透していないためペーパーレス化が難航している上に、端末は事務所のPC台のみの状態でした。

### 業務改善の取り組みについて

- コミュニケーションの円滑を図り、職員を探す手間を省くためにインカムを導入しました。
- 職員が少人数でも見守りができるように見守りセンサーを導入しました。
- 介護記録ソフトと連動するバイタル測定機器を導入してバイタルの自動入力での簡便化、誤入力防止を図りました。
- 同時に記録入力できるようにタブレット端末を導入をして、ペーパーレス化を推進しました。



【導入機器でバイタル測定】



【バイタルが自動入力される様子】



【見守りセンサーの管理画面】

### 事業所における改善効果について

- インカムによる会話だけでなく、生成AIを使って翻訳することで外国人職員の申し送りの内容の理解不足を補えるようになりました。
- 計測値が自動入力されることで今まで行っていた入力前のメモ書きが不要となりました。
- バイタル測定機器にある機能を有効活用し、利用者ごとに警告値を個別設定し、その人に適した個別ケアが可能となりました。
- タブレット導入は当初、抵抗がありましたが、スマートフォンと同様に扱えると知ってからは、職員は抵抗なく入力できるようになりました。



### 取り組み後の感想と改善活動を振り返り

- 現場職員が問題点を洗い出した結果、管理者との認識の違いが明らかとなり、改善意欲が高まりました。さらに、業務支援アドバイザーの指摘により、新たな課題も見えてきました。
- 導入したバイタル測定機器の活用で測定・記録業務が30分短縮でき、さらに看護職だけでなく介護職も行うことで、利用者一人一人の体調管理がスムーズになりました。
- タブレット端末での申し送りや記録入力は運用マニュアルを作成し、改善しています。
- 業務支援アドバイザーのワンポイントアドバイス外国人職員による介護が増える中、モデル施設となれるような生産性向上を目指してください。

## 事例⑤～「あさくらモデル」による生産性向上の事例！

### 特別養護老人ホーム あさくら苑



【あさくら苑 事業所外観】

- 【法人名】 社会福祉法人 一乗谷友愛会
- 【事業所名】 特別養護老人ホーム あさくら苑
- 【所在地】 福井県福井市下六条町18-32
- 【サービス種別】 介護老人福祉施設
- 【定員数】 76名（うちショートステイ定員6名）



【インカム活用の様子】

当施設は、日常の暮らしの延長にあるケアを大切に、入居者様一人ひとりの尊厳を守る介護を目指しています。現場の気づきから改善し進化する「あさくらモデル」により、より質の高いケアを追求しています。

### 事業所における課題

- ツールありきの導入では、現場への浸透が難しく、トップダウンでのツール導入、属人化も課題でした。
- 見守りセンサーの台数が少なく、使用すべき入居者の選定やセンサーの移動が必要でした。
- シフト作成業務が身体的・精神的な負担となり、リーダー志願者が期待するほど増えませんでした。
- 移乗時の身体的負担が大きく、休職者や退職者が出てしまいました。



### 業務改善の取り組みについて

- 「ツールを導入すること」よりも「どのように活用するか」を重視し、現場主体による業務改善を前提としたツールの選定・導入を行いました。
- 見守りセンサーを試験的に全床導入し、導入効果がわかるKPIを設定・測定しました。
- シフト作成AIツールを導入し、基本パターンはAIが作成し、微調整のみ人手で対応するようにしました。
- 移乗用リフトや移乗ボードの導入でノーリフティングケアを目指し、業務負担の軽減と入居者の身体機能低下の予防を図りました。



【委員会活動の様子】



【AIツールでシフト作成】



【移乗用リフトの研修】

### 事業所における改善効果について

- 現場の気づきから改善し進化させる「あさくらモデル」が現場で浸透してきました。
- 余裕のある業務、利用者や職員の満足度向上に繋がることがKPIで判断できたため、見守りセンサーを全床導入しました。訪室回数の減少、利用者の眠りを妨げないケアが実現できました。
- シフト作成が業務時間内に終わるようになったので、リーダーの業務負担が軽減しました。
- 移乗方法の統一も行き、経験の浅い職員でも安定した介助が実践可能となったため、職員も利用者も安心して移乗できるようになりました。



### 取り組み後の感想と改善活動を振り返り

- トップダウンではなく、現場の声を起点に各種取り組みを推進しました。移乗介助の標準化とシフト作成業務の効率化により、身体的負担の軽減とケア時間の創出に繋がっています。今後も現場主体の改善を継続し、職員・入居者双方の満足度向上を目指します。
- 見守りセンサーや移乗リフトの導入により、利用者・職員の双方に良い影響があったので、満足度の更なる向上に繋げていきたいと考えています。
- 業務支援アドバイザーのワンポイントアドバイス生産性向上活動に最適な「あさくらモデル」の実践を引き続き行ってください。

## 事例⑥～ICT利活用により未来のスタッフに選ばれる取り組み!



【溪山荘 事業所外観】

### 特別養護老人ホーム 溪山荘

- 【法人名】 社会福祉法人 敬仁会
- 【事業所名】 特別養護老人ホーム 溪山荘
- 【所在地】 福井県敦賀市中81-1-5
- 【サービス種別】 介護老人福祉施設
- 【定員数】 80名



【施設内イベントの様子】

敦賀市中の山頂にあって市内を一望できる自然豊かな施設であり、介護・看護サービスはもちろんのこと、毎日のコミュニケーションを大切に、お一人お一人の個性やライフスタイルを尊重した、ご満足頂けるサービスを提供しています。また科学的根拠に基づいた、自立支援介護を実践しており、どのような認知症の症状でも、ケアが原因の症状は必ず改善していただくという強い意志で取り組んでいます。

### 事業所における課題

- 業務中の職員との連絡や情報共有に時間がかかっていました。
- ナースコールの対応に関して、時間・確認に時間がかかり、他のご利用者の対応中であれば、「早く対応しなければ」という職員の大きなストレスになっていました。
- 記録を打ち込むのにスタッフルームのパソコンに向かっていない暇もない時がありました。
- 夜間の排泄介助の個別対応や、人によっては排便感覚がつかめないご利用者もあり、介護の知識・技術・経験値だけでは対応が限界であると感じていました。

### 業務改善の取り組みについて

- 介護ソフトを音声入力機能が充実したケアカルテ（ハナスト機能）に変更するとともに、骨伝導タイプのインカムを導入しました。
- 見守りセンサー導入と同時に、通信機能を持ったナースコールを導入しました。
- 排便時の匂いをセンサーでキャッチし、職員に知らせる「ヘルパッド2」の導入・活用が進みました。
- 導入した見守りセンサーにより睡眠状況を確認し、個別での排泄介助支援に繋がる取り組みを構築しました。
- 既存の生成AIを活用した議事録等の作成による事務負担の軽減を進めました。



【導入機器の説明会の様子】



【導入機器準備の様子】

### 事業所における改善効果について

- 従来のパソコン中心の記録入力運用では、タイムリーな入力が難しかったですが、タブレット端末導入により、記録時間の短縮ができました。
- 生成AI活用により、議事録作成時間が大幅に短縮しました。
- 見守りセンサー導入により、スマートフォンで居室の様子がわかることで「根拠に基づいた訪室判断」ができるようになりました。
- 生産性向上委員会を通じて、新しいICT機器を活用することに前向きな職員が増え、業務改善を推進する体制が整いつつあります。

### 取り組み後の感想と改善活動を振り返り

- 施設の考え方、規模、職員の能力、施設の構造、ご利用者の状態を考えた上で、当施設に合ったICTの普及、生産性向上の取り組みができました。
- 介護の身体的負担となる、入浴介助、移乗介助、移動介助について、さらなる介護ロボットの導入を検討し、年配の職員の皆さんが、年齢を重ねても現役で介護の仕事を元気に笑顔で続けていけるような環境を目指しています。
- 業務支援アドバイザーのワンポイントアドバイス見守りセンサー、介護記録ソフト導入を中心としたシステム整備により、働きやすい職場環境改善に繋がった事例と言えます。従前から推進されている「おむつゼロ」の取り組みに繋がることを期待します。

## 事例⑦～機器導入で変化する期待、未来、新時代！

### 介護老人保健施設 坂井ケアセンター

- 【法人名】 社会福祉法人 坂井来春会
- 【事業所名】 介護老人保健施設 坂井ケアセンター
- 【所在地】 福井県坂井市坂井町折戸1-58
- 【サービス種別】 介護老人保健施設
- 【定員数】 100名



【坂井ケアセンター 事業所外観】

坂井市坂井町・春江町の各拠点で、施設サービスや在宅サービスなどを広く提供する法人です。法人内の介護事業所の中核を担う存在として、法定研修を中心とした研修や職場環境の改善など、介護の質の向上を図る取り組みを行っています。



【法人内の介護技術研修会の様子】

### 事業所における課題

- メモ記載、所定様式への記載、ステーションでの転記と「3回書く」手間が重く、申し送りは朝だけでなく、遅番職員が来てからも行うという非効率な状況にありました。
- 利用者の病院受診用書類を看護師が手書きし、それをさらに事務職員がPCで打ち直すという職種間の重複作業が発生していました。
- 事業所が広く、現場とステーションを往復する移動距離の長さや時間が大きな課題でした。
- 食事等のとろみ作りが特定職員に限定され、職員の日曜早朝出勤等の負担がありました。

### 業務改善の取り組みについて

- 全館Wi-Fiを整備し、スマートフォンやタブレット端末で記録入力可能な介護ソフトを導入しました。また、音声入力やタッチペン入力など多様な入力方法を確保しました。
- 介護ケアを止めず即時連絡できるインカムと、状況を一括で確認できる見守りセンサー・大型モニタを導入しました。
- 食事のとろみを「誰でも同じ濃度で作れるように」と、現場職員の要望から「とろみサーバー」を導入しました。
- 『気づきシート』で課題を可視化し、生産性向上委員会で業務の置き換え・変更を検討・実現しました。



【端末での記録活用の様子】



【技能実習生の様子】



【とろみサーバー活用の様子】

### 事業所における改善効果について

- スマートフォンやタブレット端末の導入にステーションからは戸惑いの声がありましたが、音声入力やタッチペン入力など入力方法を限定しなかったことで受け入れがスムーズに進みました。活字化により技能実習生からも「申し送りが読みやすい」と好評です。
- インカムによる情報連携で職員を「呼び回り・探し回る」業務がなくなりました。職員が楽しみながら活用できており、即時共有が当たり前になりました。
- 見守りセンサーは、老健における行動検知に加え、看取り前の状況把握において効果が期待できます。
- とろみサーバーは独自マニュアルを作成し、特定の職員に頼らず、誰でも安定した品質のとろみを提供できるようになりました。

### 取り組み後の感想と改善活動を振り返り

- ICT機器等の導入への不安は、導入直前がピークで、苦手意識のある職員はネガティブな状況でした。導入前後の業務の変化をイメージしてもらうことで、受け入れが進みました。
- 導入後、技能実習生から「崩れた手書き文字が読めないことがあったので、活字になり読みやすくて嬉しい」との声があがり、高齢職員からも「記録が楽になれば介護に余裕ができる」と前向きな言葉が聞かれるなど、意識の高まりを感じました。
- ICT機器の導入を機に、職員の意識変化とともに期待できる未来が見え始めました。長く続いた紙の文化を乗り越え、当施設は今まさに新時代へと一歩を踏み出しています。



## 事例⑧～出来るところから始める無理のない改善の事例！



【あさむつ苑 事業所外観】

### 特別養護老人ホーム あさむつ苑

【法人名】 社会福祉法人 新清会

【事業所名】 特別養護老人ホーム あさむつ苑

【所在地】 福井県福井市引目町2丁目21-9-2

【サービス種別】 介護老人福祉施設

【定員数】 70名



【施設内イベントの様子】

当施設は、心身に障害があり常に介護を必要とする方のうち、在宅で十分な介護を受けることが困難な方を対象とした入所施設となっています。安心して生活していただける環境を整え、日常生活全般にわたる身の回りの支援を提供しています。

### 事業所における課題

- ナースコールによる呼び出しの度に事務所に戻る必要があり「大幅なタイムロス」となっていました。
- 利用者から目が離せない状況にもかかわらず介護記録の目視確認が必要で、介護ケアの手を止める必要がありました。
- 手書きに慣れてしまっているため、手書きの介護記録から脱却できず、ペーパーレス化の弊害になっていました。
- PC操作が苦手で入力に時間がかかる職員にとって、他の職員より時間がかかることが心的負担となっていました。

### 業務改善の取り組みについて

- エリア別にコール音が異なるスマートフォン対応のナースコールシステムを導入し、事務所に戻らず現場で確認できるようにしました。
- 介護記録を音声検索できるツールを導入し、ハンズフリー化を目指しました。
- 一気にペーパーレス化せず、手書き記録の有用性を活かした紙記録とデジタル記録との共存を図りました。
- スマートフォンの音声入力とナースコール履歴の自動入力機能で記録漏れや記録ミスの削減を図りました。
- 見守りカメラを導入し、訪室の負担軽減を図りました。



【スマホで音声入力】



【ナースコールをスマホで確認】



【導入時研修の様子】

### 事業所における改善効果について

- 事務所に戻らず、現場でナースコールした利用者を確認し、利用者のところへすぐに行けるようになり、対応の遅れが減少しました。
- バイタルなどの重要な情報を音声検索ですぐに確認できるよう検証するなど、今までにない一歩進んだ活用を試みるようになりました。
- 無理な改善は業務に支障が出ることを認識でき、紙面の有効性（一覧化した確認など）を再確認できました。
- 一部の職員で改善効果があったとされないよう担当業務の分担を平準化して、職員全体で改善効果があったと実感できることが重要だと再認識しました。



### 取り組み後の感想と改善活動を振り返り

- 導入した見守りカメラの映像で状況を把握し、どの利用者から訪室するかなどの対応の優先順位を判断できるようになりました。
- 職員間のリアルタイムな連絡ができるようになり、連携が強化されたと実感しています。
- 業務支援アドバイザーのワンポイントアドバイスチームで協力しながら、ひとつずつ改善していけば、必ず生産性向上に繋がります。

## 事例⑨～データ活用によるLIFE取組を視野に入れたICT整備!

### 特別養護老人ホーム 藤島園



【藤島園 事業所外観】

【法人名】 社会福祉法人藤島会

【事業所名】 特別養護老人ホーム 藤島園

【所在地】 福井県福井市高木中央3丁目1701番地

【サービス種別】 介護老人福祉施設

【定員数】 105名



【施設内イベントの様子】

当施設は身体上または精神上、要介護状態にある方で、いろいろな事情で家庭で介護を受けられない方々をお迎えしてお世話をさせていただきます。明るく家庭的な雰囲気の中で、日々を送っていただくことを目的としています。また、高齢者の方が地域で安心して生活ができる拠点施設として、地域の介護力の向上等、地域福祉の向上に努めています。

### 事業所における課題

- 介護記録に要する時間が長く、業務負担が大きい状況となっていました。
- 申し送りが紙運用で、転記作業が発生していました。
- 通信環境が不安定で、現場での記録時間が確保しにくい状況となっていました。
- 夜勤職員の身体的・心理的な負担が多くなりました。
- 利用者の状態把握が見た目・経験に依存しており、データに基づいた判断ができていませんでした。

### 業務改善の取り組みについて

- タブレット端末の音声入力機能をフル活用するため、音声入力機能が充実した介護記録ソフトを導入しました。
- 複数のICT機器を活用できるように通信環境が安定するようにWi-fi環境を整備しました。
- 夜勤職員の負担軽減のため、見守りセンサを導入しました。
- 既存の生成AIを活用することで、議事録作成などの事務負担の軽減を図りました。
- タイムスタディ調査により、「Before/After」の定量効果を測定・分析しました。



【活用している移乗支援機器】



【タブレット機器・設置の様子】



### 事業所における改善効果について

- 安定した通信環境整備やタブレット端末の音声入力による介護記録作成を行い、記録時間の短縮が実現しました。
- 見守りセンサー導入により夜勤職員の負担軽減（移動距離・巡視回数の減少）が図られました。
- 見守りセンサー導入により情報を可視化し、データに基づいた判断を行えるようになりました。
- タイムスタディ調査により、夜勤者の移動量（12,885歩/平均）が可視化され、見守りセンサー活用による業務改善効果を定量的に判断出来るようになりました。

### 取り組み後の感想と改善活動を振り返り

- データ活用によるLIFE取組を視野に入れたICT整備が進められました。
- 今後、新しい介護テクノロジーを導入するための基盤構築ができました。
- 導入した機器を持続的に活用できるよう、独自マニュアル等の整備を行っていきます。
- さらなる生産性の取組みにより職員の負担軽減を図り、離職防止につなげていきたいと考えています。
- 業務支援アドバイザーのワンポイントアドバイス 個々の職員でのスキル差を埋めるべくデータ分析が出来る環境が整ったことを活かし、引き続き業務改善を推進してください。